北海道大学大学院文学研究院　応用倫理・応用哲学研究教育センター主催

公開シンポジウム フェスタ 国立大学2022

宗教を問い直す

西欧社会におけるヴェール論争、同性婚に反対するキリスト教保守派の人々、日本の山岳修行地にいまだに残る女人禁制など、宗教とジェンダー・セクシュアリティに関わる問題は世界各地に存在しています。これらの問題に対し、女性の人権を擁護する立場からの運動が起こっている一方、信仰の自由や伝統文化の継承といった観点を重視する人たちもいます。ジェンダー・セクシュアリティについて考えていく上で、「宗教」は避けては通れない課題であるにもかかわらず、これまでの宗教研究は全般的にジェンダー研究に積極的であったとは言えません。他方、ジェンダー研究もまた宗教研究をあまり重視してこなかった面があります。本シンポジウムを通じて、そうした状況を少しでも変えていきたいと考えています。

宗教は苦しむ女性たちを救済してきた一方、女性を差別し、抑圧する装置でもありました。本シンポジウムでは、キリスト教研究、イスラーム研究、仏教（および日本宗教）研究、それぞれの専門家をお招きし、家族、女性、リプロダクションといった観点から、宗教とジェンダー・セクシュアリティをめぐって具体的にどのような問題が存在し、どのような考え方が示されているのか、宗教のあり方の再検討も含め、報告を受け議論したいと思います。今日的な状況をふまえながら、宗教とジェンダーの問題に正面から向き合ってみましょう。

2022
11/6（日）
13:30〜17:00（開場13:00）

参加費無料（事前申込制・定員80名）

北海道大学
学術交流会館・小講堂
札幌市北区北8条西5丁目

講　演

伝える・受け継ぐ・保つ・変える
―宗教とジェンダーをみる視点

猪瀬 優理（いのせ ゆり）
龍谷大学社会学部教授

“Stop Killing Us!”
―内部からのキリスト教批判

工藤 万里江（くどう まりえ）
明治学院大学キリスト教研究所客員研究員

ジェンダー・オリエンタリズムの向こう側
―ムスリム女性の「リアル」とは何か

嶺崎 寛子（みねさき ひろこ）
成蹊大学文学部准教授

コメンテーター　**ケイトリン・コーカー**（けいとりん・こーかー）
北海道大学大学院文学研究院准教授
応用倫理・応用哲学研究教育センター運営委員

司　会　**宮嶋 俊一**（みやじま しゅんいち）　北海道大学大学院文学研究院教授
応用倫理・応用哲学研究教育センター長

※新型コロナウイルスの感染状況により、シンポジウムをオンラインでの実施に変更する可能性があります。
※主催者側では、感染症対策として、アルコール消毒液による座席の消毒や、会場内の換気を徹底いたします。

シンポジウムの参加には申し込みが必要です。参加申し込みは、応用倫理・応用哲学研究教育センターの HP をご確認ください。

来場には公共交通機関をご利用ください。

北海道大学 HOKKAIDO UNIVERSITY　CAEP HOKKAIDO UNIVERSITY

お問い合わせ
Email: caep@let.hokudai.ac.jp
Tel: 011-706-4088（平日 9:15-16:00）
URL: http://caep-hu.sakura.ne.jp/
Twitter: @caep_hu

講演要旨

公開シンポジウム
フェスタ
国立大学2022

宗教を問い直す
家族・女性・リプロダクション

伝える・受け継ぐ・保つ・変える
――宗教とジェンダーをみる視点
猪瀬 優理

専門は宗教社会学。著書に『信仰はどのように継承されるか――創価学会にみる次世代育成』(北海道大学出版会、2011年)、『人口減少社会と寺院』(共著、法藏館、2016年)、『しあわせの宗教学』(共著、法藏館、2018年)、『ともに生きる仏教』(共著、ちくま新書、2019年)、『近現代日本宗教史第5巻　模索する現代――昭和後期～平成期』(春秋社、2021年)、『現代社会を宗教文化で読み解く――比較と歴史からの接近』(共著、ミネルヴァ書房、2022年)など。

「ジェンダー」とは何でしょうか。「セクシュアリティ」とは、「リプロダクション」とは?　これらの「つながり」はどのようなものでしょうか。また、そこに「家族」はどのようにかかわっているのでしょうか。「女性」と「男性」はこのなかでどのような考えを持ち、どんな行動を取ることを誰にどのように期待されているのでしょうか。「宗教」は人びとの営みの間でどのような働きを持っているのでしょうか。具体的な事例についても触れながら、宗教とジェンダーに関わる問題を考えるための視点について、ともに考えてみたいと思います。

“Stop Killing Us!”
――内部からのキリスト教批判
工藤 万里江

専門はジェンダー、セクシュアリティとキリスト教。著書に『クィア神学の挑戦――クィア、フェミニズム、キリスト教』(新教出版社、2022年)、訳書にパトリック・S・チェン『ラディカル・ラブ――クィア神学入門』(新教出版社、2014年)。最近の論文に「「下品な神学」がめざすもの――マルセラ・アルトハウス=リードと交差性」『現代思想』(青土社、2022年5月号)。

キリスト教の保守的な性規範は今日もなお、女性の性／生を執拗にコントロールしようとし、性的マイノリティへの差別・迫害を生み出しています。その一方で、キリスト教の内部からその異性愛主義や家父長制に抵抗する試みもすでに長く紡がれてきました。本発表では性規範をめぐる内部からのキリスト教批判に焦点を当て、その多様な試みを概観するとともに、そうした試みの背後にある思いを探ります。フェミニズムやクィアの視座とキリスト教思想との架橋は可能なのか――しばしば相容れないと思われるこれらをつなぐ挑戦に迫ります。

ジェンダー・オリエンタリズムの向こう側
――ムスリム女性の「リアル」とは何か
嶺崎 寛子

専門は文化人類学、ジェンダー学。「主体的にムスリムであることは、当事者女性にとってどういうことか」を探求しています。フィールドはエジプトと、英領インド発祥のイスラームの少数派、アフマディーヤ教団。主な著書に『ジェンダー暴力の文化人類学』(田中雅一との共編著、昭和堂、2021年)、『イスラーム復興とジェンダー――現代エジプトを生きる女性たち』(昭和堂、2015年)、『宗教とジェンダーのポリティクス』(共著、昭和堂、2016年)、『いまを生きるための宗教学』(共著、丸善、2022年)など。

ムスリム女性については、ムスリムがマイノリティな地域では特に、当事者不在のままイメージだけが語られがちです。ムスリム女性はヴェールを被らされていて、一夫多妻を認める家父長的な教義によって迫害されている、等々。ではその語りを語る側と聞く側は、ムスリム女性の声をきちんと聞いたことはあるのでしょうか。ここでリアルなムスリム女性についてお話しできればことは単純なのですが、ムスリム女性は民族も母語も居住地域も階層も多様で、とても一括りにしては語れません。イメージが先行して当事者の声が聞こえない、この現在地からどうやって私たちは、多様なムスリム女性のリアルを知ることができるのかを、一緒に考えます。

*** コメンテーター ***
ケイトリン・コーカー

専門は人類学。単著書に、『暗黒舞踏の身体経験――アフェクトと生成の人類学』(京都大学学術出版会、2019年)。共著書に『官能の人類学――感覚論的転回を超えて』(ナカニシヤ出版、2022年)、La douleur à l' œuvre—Corps, art, folie (Editions in Press, 2022)、The Routledge Companion to Butoh Performance (Routledge, 2019)、Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture (Lexington Books, 2020)など。共編著にAn Anthropology of Ba—Place and Performance Co-emerging (Trans Pacific Press, 2021)。

北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY
CAEP HOKKAIDO UNIVERSITY
お問い合わせ／応用倫理・応用哲学研究教育センター事務局
Email: caep@let.hokudai.ac.jp　Tel: 011-706-4088(平日 9:15-16:00)
URL: http://caep-hu.sakura.ne.jp/　Twitter: @caep_hu